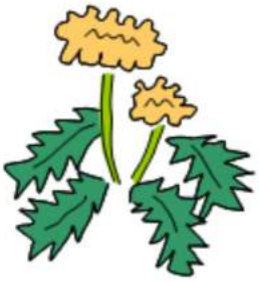
たんぽぽ

NO.410
R3年9月1日
-発行-
〒869-1217
熊本県菊池郡
大津町森54-2
社会福祉法人
三気の会
三気の里
☎096-293-8100



「秘めたちから」

施設長　木下 昭二

この原稿を書いている今、まさに一年延期となった二〇二〇年東京パラリンピックが開催されています。この新型コロナウィルス感染症が蔓延する中でのパラリンピック開催の是非の議論は別として、この大会の為に5年もの歳月をかけて粛々と準備をして来られた選手の方々、そしてその選手をサポートして一緒に頑張って来られた関係者の方やご家族の方々など、本人だけでなく、取り巻く多くの方々の思いが詰まった大会が無事に開催されている事に、喜びを感じています。そしてその世界中の国から集まったパラリンピックアスリートや、日本選手の活躍に焦点が当てられ、日々報道されている事を嬉しく思っています。

競技の中には、それぞれの障がいの種類（身体・精神・知的）の特性に配慮された種目もあれば、基本的に健常者のルールとほとんど違いのない競技があったり、私が観る事が出来た競技の範囲内での個人的な感想として、パラリンピックの選手のパフォーマンスの方が、迫力や臨場感があるようにも感じました。そのたびに、歳を重ね涙腺が弛くなっている私は、感動の多量の汗を眼から放出しながら観ています。（笑）今大会が新型コロナウィルスの関係で無観客開催となってしまっている事を、改めて残念に思います。

三気の里が開設して、まだ間もない頃だったと記憶していますが、町内のマラソン大会に出た時の事。当時10歳台後半だった利用者さんとスタッフが5㎞クラスに出場するので、応援に行きました。一般出場選手の中に、その利用者さんがタイプの女子中学生がいました。しかもその学生さんは現役陸上部の出で立ちでした。利用者さんはその学生さんの後ろを必死で着いて走った結果、男女合わせて500名以上の出場選手中で27～28位の好成績でした。

また別の利用者さんの話しで、その利用者さんは当時の中等部時代の50ｍ走の記録を持っている、との話しでした。しかし、その利用者さんは特性上、毎回ピストルの合図と同時にロケットスタートが切れた訳ではなかったので、県の代表選手などとして活躍する機会はなかったようです。他にも箱根駅伝を走った弟さんを持つ利用者さんもおられます。もちろん当時の本人さんも、弟さんに負けず劣らずの走りのポテンシャルを持っておられました。

当時からパラリンピックは行われていましたが、今ほどテレビ等で取り上げられていなかった事などもあり、利用者さんがその選手として大会に出場したり、その先にパラリンピックがある事を、考えてあげることが出来ませんでした。しっかりとその事を受け止めて、本人の持っている能力を伸ばす方向で取り組んでいたら、もしかしたらメダリストとしての違った人生を観せてあげる事が出来ていたかもしれません。そう考えると、申し訳なく思う気持ちでいっぱいです。

スポーツ分野に限らず、もっと他にも私達スタッフが気付いていないだけで、色々な「得意分野」や「秘めた能力」を持っている方があると思います。一人ひとりの利用者さんの「得意分野探し」は、今からでも遅くはありません。大袈裟かも知れませんが、無限の可能性を持った利用者さんが、この世に生を受けた意味や生きた証を感じられる時間を過ごしてもらえるように、これからも大きな・細やかな視野を持って関わり続けていきたいと思います。

9月

1班「はじめての生活」

今年から1班に配属され、関わりはあったものの、毎日1班の皆さんと一緒に生活する事は、今年が初めてでした。育児休暇から復帰し、経験の少ない班に配属され、不安もありました。しかし、一緒に過ごしていて、作業の意識が高く、一生懸命作業をされる姿にとても素敵だなと思いました。

今年から担当として関わることになったAさんは、登所日にはパッキン作業を頑張られています。取り組みがスムーズにいかない時もありますが、三気の里に登所されてから確認することは、「今日の作業はあるのかどうか」です。Aさんに作業がありますと話をすると、安心されるようで、実際に作業棟に行って作業がスタートすると、黙々と頑張って取り組まれます。

勿論作業だけでなく、Aさんが楽しみにされているローソンの移動販売であったり、レクリェーションであったりと、今後もAさんと関わりの度合いを深めていき、更に寄り添える支援ができるよう、日々努力したいと思います。　　支援員　宮岡　春奈

2班「クラブ活動を通して」

月に一回、クラブ活動の一環として、芸術クラブを開催しています。様々な素材や、技法を用いて、面白い作品作りに取り組んでいる所です。8月は、貼り絵で花火を作りました。創作活動が大好きな担当のMさん。「この色がきれいだな」「ここに貼ったら良いかもしれない」と、試行錯誤されます。その表情は正に真剣そのもの。初めは、円形に貼ることに苦戦されていましたが、円の補助線に従って貼ることで、花火らしく、とても素敵な作品が出来上がりました。Mさんは、スタッフに「できました！」と元気な笑顔で、作品を見せに来られます。作業とはまた違った、Mさんの姿をまた一つ見ることが出来た時間だと感じました。三気ではその他にも、たくさんのクラブ活動が実施されています。これからもどんどん知られざる2班さんの新たな一面を見つけていきたいです。　　支援員　伊藤　愛理

3班「支援方法について」

三気の里に来て4ヶ月が経ちました。初めは利用者さんの名前を覚える事も一苦労でしたが時間が経つうちに少しずつ慣れてきました。

特性の一つなのか、特に食事の際、食事を詰め込む利用者が多いように感じられます。詰め込み過ぎると命の危険もある為、支援員は特に目を光らせておかなければなりません。先輩支援員から支援方法の話を聞いてなるほど、と感じたのが非言語コミュニケーションでした。利用者の方が走り出しそうな体制の時も口頭で「走りませんよ」と注意するより目線を合わせてアイコンタクトを取りながら利用者さんのすぐ傍に立っているだけでも効果がある、言われていました。

私もそれからは利用者さんにわかりやすいジェスチャーやアイコンタクトをとるよう心がけています。当然上手くいかないこともありますが利用者が少しでも安全な環境づくりが出来るようにこれからも頑張っていきたいです。

支援員　髙永　悠乃

4班「楽しい仕事」

私の48年間の仕事人生の中で、ここ三気の里の仕事は楽しく、私にとって、一番遣り甲斐のある仕事だと思っています。

自分が苦手なことをやる、又はやらされる時、人は自信を失ったり、やらされる事に激しい怒りを感じます。これは利用者さんにも当てはまる事だと思っており、苦手な活動等に対して、口で直接言われる方もいれば、行動に表れる方などそれぞれです。ただし、やらなければならない事自体を拒否しているのではなく、私達支援員やそれを得意とする周囲の方々に助けてもらい、何とかしようという行動なのです。

私はもやもやした感覚や嫌な気持ちを、良い方向にエネルギーと変え、毎日の仕事を楽しくやらせていただいています。利用者の方々にも、もやもやした感覚をエネルギーに変え、毎日を楽しく過ごしてもらえるように支援を行いたいと思います。コロナ禍でも、感情に振り回されない、楽しい生き方をしていきたいと思います。

支援員　今村　修一

5班「散歩」

今年は梅雨が明けても雨が多く、納品やドライブに出るにも一苦労するくらい大雨が続きました。散歩に出られる日も少なかったのですが、ある日の午後に久しぶりの晴れ間が見られたため、5班のみんなで散歩に行きました。久々の散歩に初めはみなさん暑そうにされていましたが、汗をかいてくると笑顔も見られ始め、晴れた空や景色を見ながら「久しぶりの散歩は気持ちいいね」と話をしながら歩いていました。帰った後はしっかり水分補給を行いました（夏になり、暑さも増したので、現在三気の里では毎日スポーツドリンクでの水分補給を行い、熱中症対策や脱水症状の防止を行っています）。私自身、運動不足なので久しぶりの散歩はきつさもありましたがすがすがしさと満足感を実感する機会になりました！みなさんと素敵な時間を共有できたなと思えたひと時でした。これからもそんな時間を作っていきたいなと思います。

支援員　石原　佳奈

療育雑記

「バトン渡し」

業務課長　本田　誠

先日開催された東京オリンピック・パラリンピックでは、いくつもの感動が生まれ、一時ではありますが、コロナ禍というストレスを軽減する機会になりました。最も印象に残ったシーンは、「4×100mリレー」です。日本の武器としていたバトン渡しに失敗し、敗れた後の選手一人一人の表情がとても印象的でした。自分の走りに集中した上で、次の走者、前の走者のことも考えなければならない競技であり、「繋ぐ」ということの難しさを改めて感じました。三気の里でも、日々支援員から支援員へとバトンを繋ぎ、情報を共有しながら24時間体制で利用者さんをサポートしています。具体的に言うと、先ず業務前に先日までの利用者の方の健康面、行動面、その他業務に関する申し送りを文書（日誌）にて確認し、業務に就きます。その後、周囲の利用者の方に考慮しながら、交代の支援員間でその日の様子などの申し送りが行われます。この場面こそ、言うなれば一生懸命走ってきた支援員と、これから走り出す支援員とのバトン渡しの場面です。業務前に確認する文書での申し送りも同様ですが、申し送りとなるとどうしても注意事項中心の内容に陥ってしまいます。勿論、命を守る為には、注意事項の伝達も重要ですが、心身ともにフレッシュな状態で業務に就いた途端に、注意事項のみでのバトン渡しでは、今からスタートする利用者の方との関わりに、重さを感じ力みが生じます。また、次の支援員に繋ぐ際も注意事項に関して評価で終わり、結果、負のサイクルに陥ってしまいます。このサイクルでは、モチベーションも下がり、良いパフォーマンスが発揮されません。何より、関わりの中で見せてくれる利用者の方の成長や訴えに気付くことができません。それとは逆に、バトン渡しの際に、利用者さん個々の成長や新たな気付きを、笑顔で伝えてくれる支援員がいます。このバトンを受けると、私自身心地良い気分となり、その日の利用者の方とのファーストコンタクトでも、「頑張っていますね」「凄いですね」の言葉と態度からスタートします。利用者さん本人も、支援員が代わってもしっかりと自分の頑張りを知ってくれていると安心感を抱きます。また、皆の頑張りを次に繋ごうと考えることで、良い視点での関わりが生じ、利用者さん・スタッフにとって良いサイクルとなります。私が感じる心地良いバトン渡しと、そうでない場合の違いを考えると、伝達の際に必要となる評価の仕方に違いがあるように感じます。心地良いバトンを渡してくれるスタッフは、①利用者さん個々の持つ行動障がいは十分理解しているが、そのことにはあえて目を向けず、評価の対象としない。②周囲と比較することなく、本人の成長に視点を置き評価する。③関わりを通して次の課題を明確にする。④自分自身の支援を評価し次に活かす。⑤評価がぶれないよう、自分自身をコントロールし、毎日フレッシュな心身で関わりを持つ。以上のことが実践できている支援員だと感じています。人を評価するということは重大な責任が伴います。三気の里の支援員は、経験年数に関わらず、人を評価し伝達する機会があります。正しく評価する為には、常に自問自答を繰り返し、自分自身の視野を広げるなど、成長が求められます。今後も良いバトンを繋ぎ、皆が心地良く走り出せるよう努力を重ねて行きます。

課長便り

「オリンピックに向かう気持ちで」

事業課長　平川　聖子

開催の是非を問われ続けた東京オリンピックが終わりました。東京オリンピックイヤー生まれで聖火由来の名前を授かった私は、二〇二〇年東京オリンピックの開催が決まった時には、会場に行って生で観戦したいと意気込んいたものでした。しかし、二〇二〇年は新型コロナウィルスの世界的パンデミックに見舞われ、1年延期をした二〇二一年の東京も未だ感染の勢いが止まらないまま。正直なところ、観戦どころかオリンピックの開催にも賛成できない気持ちでいました。

それでもオリンピックが始まり、馴染みのある柔道や水泳の競技が行われていると知ると、観戦せずにはいられませんでした。オリンピックに向けた情報収集をしていなかったので、選手の名前や顔をほとんど知らないままの観戦でしたが、一戦また一戦と見るごとに選手の気迫を感じ、勝っても負けても感動し、そして元気をもらったことは間違いありません。

オリンピック後の感染状況は悪化し、全てを肯定的に考えることはできませんが、オリンピック出場に向けて真摯に努力を重ねられた選手の方々に敬意を表し、私も私の置かれたところで最大限の努力をしていきたいと強く思いました。ワクチン接種後も決して油断はできない状況において、日々の感染対策を確実に行い、施設へのコロナ侵入を防ぐとともに、活動低下やストレスによる衰えを防ぐこと、外に出られるようになったときに役立つスキルを身につけておくことを意識した支援を心掛けているところです。

苦情解決

「ものわかる職員」

部長　松本　慎太郎

三気の里では、毎月1回、利用者の方の意見を聞く「話し合いの部屋」を実施しています。話したいことがある方を募って、話を聞くというものですが、そのやり方では、いつも同じ人、同じ話だったりします。また「何か困ったことや言いたいことありますか？」と聞いても「ありません」と答えて終わってしまったり、自分の今後の予定や好きな物を言って終わってしまったりする方がいます。それでも良い面はありますが、施設を良くしていくためにも、利用者の思いや要望を引き出すことが求められます。そのため、参加を希望しない方にも声をかけたり、写真などを使うことで伝え易く、選択し易くしたり、受け答えの練習をしたりと様々な工夫を行っています。ある本の中に「ものいわぬ農民は、決して物言わぬ農民でもなく、また物思わぬ農民ではない」とありました。「農民」は「利用者さん」に置き換えることができると思います。利用者さんは思いがあっても、それを上手く言葉で言えなかったり、表現できなかったりします。その思いを汲み取れるかは職員にかかっていると思います。

アンパ

「今できる大切なこと」

支援員　黒澤　加代子

コロナ禍により様々な活動が制限される中、アンパの利用者の方達は日々の活動（パンやクッキーの製造）を毎日一生懸命頑張られていますが、ふと寂しそうな言葉や表情を見せられます。そのような中で少しでも活力になり楽しんでいただけたらと今年度は『アンパの日』を月1回設け、パンやクッキー製造を休み、おやつ作りや創作活動、スタンプラリー等を行なっています。5月はご家族へのそれぞれの思いを手紙や絵で書かれ、ご家族の方からも手紙や電話をいただくことができとても喜ばれていました。7月の『アンパの日』のクレープ作りでは、材料の計量やホイップ作り等日頃の作業の成果も見られとても嬉しく思いました。

また、『創作活動の日』も新たに設け、三気の里の利用者の方達に来ていただき、ピザやクッキー作り、草木染等を体験していただいています。できあがったピザやクッキーを美味しそうに食べられたり、作品を嬉しそうにみんなに見せられる姿を見ながら、この活動が地域の方達へも早く提供できる日が来るよう願っているところです。

9月スケジュール

3日(金)芸術クラブ/創作クラブ
10日(金)嘱託医来診
11日(土)イベント食実施
13日(月)実践キャンプ
15日(水)総合避難訓練、誕生会
17日(金)アンパレクレーション/音楽クラブ
28日(火)１班レクレーション

毎週月曜日　訪問理容サービス
毎週木曜日　ローソン移動販売

BeTREE
＜営業時間＞8:00～18:00

betree314

GHバックアップ

「GHバックアップ」
生活支援員　中村　圭助

グループホームバックアップの役割は、皆さんで生活する入居者が、より良く生活していけるための、環境の整備を行う上で、三気の里として支援すること。そして地域住民として地域の方々とつながり、出来ること（役割）を見出し、取り組んでいく事だと思っています。具体的には、各ホームの世話人、支援者は日々の生活での食事のお世話、住環境の衛生管理、そして直接利用者さんの歯磨きや排せつ確認や支援、入浴支援、話を聞くなどの支援も行います。そうした中での気付きは多く、重要なことなので、日中活動時の支援者、栄養士、看護師とも共有したうえで、支援にあたる為定期的に会議も行います。また住民として区役に参加させていただき、地域の整備を行っています。コロナ禍での生活が少しでも、良い方向に進むようにしたいと思います。

沢山のご厚意
ありがとう
ございます

【寄付】
三気の里家族会様
木原 成美様

【物品】
岡本 則子様　アネモネ様
魚谷 秀文様　井手上昌子様
田中 満子様　西村真由美様
渡邉 正司様　つくしの里様
清田 栄一様　藤本栄之助様
松村 俊介様　井手上恭子様
櫻木 勇夫様　金森 保様
宮本 眞一様　合同会社いたふ様
亀﨑 幸久様

【後援会】
牛島 敏章様　野崎 明浩様
亀﨑 和子様　千田 英文様
甲斐 真史様　田中 基幹様
松田 綏一様　魚谷 康洋様
本田 瑞恵様